

武藏寺の地蔵会



島津氏の進攻によって炎上する武藏寺（武藏寺縁起絵図第5幅）



武藏寺の「長者の藤」

毎年、ゴールデンウィークの頃になると、武藏寺（筑紫野市）の境内は、みごとな藤の花房で彩られ、多くの参拝者たちで賑わいます。樹齢8百年ともいわれる「長者の藤」は、同寺の創建者とされる伝説上の人物・藤原虎磨にちなむ樹で、市の天然記念物にも指定されています。この虎磨の命日にあたる10月15日に開かれる、おごそかな祭事が「地蔵会」です。

建武3年(1336)の少弐氏・菊池氏の合戦以来、度重なる戦禍で武藏寺は荒廃しました。村に攻め入るとき、まず村人たちの信仰の対象を破壊することは、戦国時代にはよくみられた戦術でした。そんな荒れ果てた時代に、村人に救いの手をさしのべ、一体となつて村を復興するために開かれたのが地蔵会でした。それは、自泉坊という武藏寺の僧侶によって、永禄3年(1560)に始め

されました。

武藏寺には、代々の地蔵会を記録した古文書が伝えられています。それによると、まず本尊である地蔵図が掲げられ、その前に餅・酒・柿・栗・白布などが供えられました。座の北側には9人の僧侶がすわり、南側には2

人の僧侶と修行中の僧、農民がすわりました。出席者は、総勢200人にのぼる盛大な祭りだったようです。祭りを受け持つ責任者の選出は、籤（くじ）で決められました。天正12年(1584)以降、中武藏→上武藏→下武藏の順で選出することが、ほぼ定まったようです。この三武藏が、中世以前の武藏村の範囲であり、75人の虎磨の家臣たちが居住している地域でした。僧侶たちのなかに農民の着座が定められているのが特徴で、



地蔵会帳

○○屋敷と呼ばれる家の家長たち全員が参加する「村座（むらざ）」の形式がとられていたと思われます。村座とは、村の氏神（仏）をまつるため、多くの村人が参与する組織のことです。



家臣たちによる地蔵会（武藏寺縁起絵図第5幅）

「武藏寺縁起」によると、虎麿が亡くなつたのは朱鳥元年（686）とされています。その根拠ははっきりしませんが、おそらく、虎麿は各地の長者伝説にみられるように、古代から中世へと移っていく歴史の変わり目に、急激に台頭し没落していく在地の豪族が伝説化した人物であったと思われます。しかし、それは単なる昔話として作られたわけではありません。度重なる戦乱で荒廃した村を蘇らせるためには、宗教的な強い力が必要でした。その象徴が「虎麿」だったのでしょうか。

中世の上・中・下武藏は、藤原虎麿を信仰のよりどころとして、「惣（そう）」と呼ばれる、広範囲にわたる小集落の結合体を成していました。そして、惣を運営していたのが、虎麿の家臣と伝えられる75名の

村の指導者（乙名・おとな）たちであり、武藏寺は村人たちが結束するための、信仰の拠点となっていました。また、地蔵会の祭りに参加できるのは、当初は村の代表者だけに限られていたが、時代が下るにつれて一般的な村人たちも加わるようになり、村全体に浸透していきました。「武藏寺縁起絵図」第五幅三段「家臣地蔵会」、同七段「里民拳作地蔵会」には、その様子が描かれているのではないでしょうか。このように考えると、縁起絵図が作られた理由や描かれている内容がよく理解できます。

地蔵会は、武藏村の自動的な運営を保つための、最も重要な法会として今日に至るまで、地域の歴史を伝えているといえるでしょう。

（山村淳彦）



村人たちも参加した地蔵会（武藏寺縁起絵図第5幅）